

1.4 研究の活用

本研究の成果は、次の通り活用する。

- ・結果に基づいて、規範意識の状況と規範意識醸成に向けての提案をリーフレットにまとめ、小・中・高・特の教員全員に配布し、教員及び保護者の啓発に活用する。
- ・研究の方法、手順、結果をまとめた本報告書を作成し、教育行政機関へ情報提供を行う。これにより、本県の教育振興ビジョンに示された「心の教育の推進」に寄与する。
- ・報告書とリーフレットをホームページに掲載し、広く周知する。

2 研究の内容

2.1 研究計画

本研究の研究期間は、平成22年度1年間であり、表1に示す進行計画の通り、研究を進めた。なお、宇都宮大学教育学部の澤田匡人准教授には、4月当初の質問紙の作成の段階から、統計的な分析や考察まで、多大なるご支援や御指導や御助言をいただいた。

表1 進行計画

時期	主な内容と進行計画
4月	・先行研究の調査 ・質問紙調査項目の調整
5月	・ " " の決定 ・調査マニュアルの作成 ・調査依頼(1次依頼：各学校へ調査の概要スケジュール等を周知)
6月	・単純集計フォーマット作成 ・調査用紙印刷、調査マニュアル作成
7月	・調査用紙、調査マニュアル送付(2次依頼) ・調査実施、調査用紙回収
8月	・集計作業 ・結果分析、考察、
9月	・リーフレットの作成
1月	・教育研究発表大会で発表
3月	・リーフレットの完成 ・報告書の完成、リーフレット、報告書のHP掲載。
(4月)	・リーフレット配布。

2.2 調査用紙の作成

本研究の目的の達成や目的の検証を行うために、はじめに、調査に使用する調査用紙の作成を行った。

質問項目の検討や選定においては、大学の准教授1名、15～20年の学校現場経験を有する指導主事の計6名で、約2ヶ月間の議論を重ねた。その結果、次の表2に示す質問構成とした。なお、調査の客観性を高めるために、先行研究によって検証されている「尺度」をできるだけ利用した。

表2 質問紙の構成

調査用紙	質問の内容
質問1 15項目	○前回調査、規範意識15項目 ----- 前回調査との比較を行うため
質問2 15項目	○規範意識尺度「仲間規範」 ----- 15項目を合計して用いる
質問3 18項目	○いじめ容認態度尺度 ----- いじめを認める考え方や態度
質問4 10項目	○いじめ加担経験尺度 ----- いじめに加担した経験
質問5 8項目	○社会的望ましき尺度 ----- データ補正用
質問6 31項目	○子どもの環境に関する項目 ----- 具体的な指導の手がかりを求めるため。 重回帰分析に用いる
質問7 15項目	○問題行動経験尺度「問題行動経験」 ----- 15項目を合計して用いる
質問8 15項目	○規範意識尺度「先生規範」 ----- 15項目を合計して用いる

また、質問項目ごとの選定手順や調査のねらいなどの選定理由は、次の通りである。

質問1：平成17年度で実施した規範意識に係る質問15項目は、質問を変えずに実施するようにした。聞き方は、「小学生、中学学生、高校生が、次のようなことをすることを、あなたはどう思いますか。」とした。(回答は、「悪い」「やや悪い」「やや悪くない」「悪くない」の4件法とした。)

質問2、8：規範意識尺度である「仲間規範」と「先生規範」のそれぞれ15項目においても、先行研究での利用と表記を変えずに実施した。(回答はすべて、「悪い」「悪くない」の2件法)

質問3、4：いじめに関する尺度⁶⁾である「いじめ容認態度尺度」18項目(回答は、「思う」「やや思う」「あまり思わない」「思わない」の4件法)と、「いじめ加担経験尺度」10項目(2件法)を

加えた。

質問5：自分を、社会的に望ましく見せたい欲求の影響を除去するために、「社会的望ましき態度尺度⁷⁾」を加えた。先行研究においては26項目で測定しているが、今回調査では質問総数の関係から、因子寄与率の高いものから順に8項目選んだ。

質問6：規範意識の醸成やいじめを防ぐ「具体的な指導の手がかり」を求めるための質問項目。子どもの自律生活（本人）、学校生活（先生）、家庭生活（家族）、地域、に関する4つの視点から、それぞれの状況を表3に示す31の質問項目にまとめた。（4件法）

質問7：「問題行動経験」15項目を、規範意識との関係性を調べるために実施した。正直に回答してもらうために、回答結果が回収者に見られないように、冊子内に隠れる後ろから2問目の質問7とした。（2件法）

調査用紙の合計設問数は、学年と性別を加えると131問となったが、質問2と質問7と質問8のそれぞれ15、計45の質問文はすべて同じであることや、回答は○をつけるだけにしたり、文章が読み取りやすくなるように質問紙に網掛けを施したり、漢字にはルビを振るなどの工夫により、回答者の負担はそれほど高くないと判断した。また、正確な回答を得るために、質問項目の中にいくつか逆転項目を設定したり、似た質問を前半と後半に2問ずつ並べ振り分け分けるなど、回答者の集中が切れないようにも配慮した。

2.3 調査の実施について

今回調査では、調査対象を小学校4年生から高校3年生までの9学年とした。また、調査協力校は、前回と同様に、栃木県内の地域や学校規模の偏りがないように抽出した。

高校については、学科等も考慮し、県内の高校の生徒人数比と同様に、普通科系を7校、専門学科系を3校とした。さらに、前回調査との比較を行うことから、できるだけ前回調査で実施した高校に対応させて、条件が似ている高校で調査を実施するようにした。

調査に必要なサンプル数は、栃木県の子ども（小4～高3まで）1学年約19,000人が母集団となるので、要求精度5%、信頼率90%とすると、各学年267人になる。本調査では、各学年300人以上からの回答が得られるように、小学校は13校、中学校は14校

表3 子どもの環境に関する31項目

視点	質問項目（略称）
自律生活（本人）	1 自分で起きる
	2 家族にあいさつをする
	3 家庭学習を自分からする
	4 年下の子の面倒をみる
	5 時間を守れない
	6 がまん強く最後までがんばる
	7 人とつき合うのは面倒だ
	8 誰かの役に立っていると思う
	9 失敗・困難で、やる気がなくなる
学校（先生）	1 教室の床にゴミが落ちている
	2 わたしの発表を聞いてくれる
	3 教室内の約束事は話し合いで決める
	4 クラスの人から感謝・喜ばれる
	5 協力して学習する時間をとる
	6 より良く生活を考える時間をとる
	7 自分の将来を考える時間をとる
	8 がんばったことをほめてくれる
	9 わたしのお話を聞いてくれる
	10 守らないときはしかる（指導する）
	11 「ルール」を守る理由を話す
	12 先生同士が協力している
家庭生活（家族）	1 家の中の約束事は話し合いで決める
	2 家族から感謝・喜ばれたりする
	3 がんばったことをほめてくれる
	4 わたしのお話を聞いてくれる
	5 守らないときは厳しく叱る
	6 「ルール」を守る理由を話す
	7 そろって食事をする
	8 家族同士が協力している
	9 家族は学校や先生のことをほめる
地域	1 わたしの住んでいる地域の大人は知らない子どもにも注意する

を実施校として、それぞれ1クラスを抽出した。

表4は、調査の実施対象をまとめたものである。

表4 調査実施対象

実施学年	小4から高3、全9学年
実施人数	各学年約300人 合計約3400人
調査協力学校数	小学校 13校 中学校 14校 高校10校（普通7、専門3）

調査は、平成22年7月第2週から第3週の期間内に、各学校が日時を定め、実施した。調査の実施においては、回答者ができるだけ正直に、正確な回答ができるように次の点について配慮した。

- ・回答者が特定できないようにすることを、事前に回答者に伝えた。
- ・調査用紙は、回収後、直ちに教室内の生徒の目前で封をして、そのまま栃木県総合教育センターに発送するようにした。
- ・質問1と質問2が似ていることや、質問2と質問7と質問8の質問の文章が同じで質問の立場（視点）が違うことなどの留意事項を回答者に説明した。
- ・小学生への調査は、質問番号ごとに、調査監督者が問題文を読み上げ、題意の解説を行いながら実施するようにした。

2.4 分析の方法

本研究では、研究の4つの目的を達成するために、次の分析を行う。

目的①「H17年度との比較結果」

5年前調査と同じ質問項目を同じ実施学年で比較する。項目ごとの平均や偏差を調べ、t検定により比較結果を検証することで、栃木の子どもの規範意識の全体的な経年変化や項目別の変化などの状況を把握する。

そのために行う分析について、その分析の目的と手順の概略を次に示す。

分析(1)：H17年度に実施した規範意識調査との平均を算出し、小5、中2、高2で、それぞれ比較を行う。そして、前回調査との比較を、学年別、小・中・高校の校種別（以下、発達の段階）に行い、平均値の有意差を調べる。

統計的分析手法：t検定、 χ^2 乗検定

目的②「指導のアプローチ」

本研究では、和田・久世の規範意識の定義を基に、子どもの心の中の規範意識を「仲間規範」と「先生規範」の2面から捉え、それぞれが本人の「問題行動経験」へ与える影響の大きさを調べる。その結果を比較することで、問題行動を抑制する「指導のアプローチ」を求める。分析の方法と手順は次の通りである。

分析(2)：「仲間規範」、「先生規範」、「問題行動経験」、「社会的望ましさ」の相関を求め、発達段階による差異を把握する。

統計的分析手法：相関分析

分析(3)：発達の段階ごとに、「仲間規範」と「先生規範」が、「問題行動経験」に与える影響の違いについて調べる。その際、調査結果から自分を社会的に望ましく見せたいとする気持ちによる影響を取り除くことで、より精度の高い結果が得られると考え、「社会的望ましさ尺度（8項目）」を項目に加え、以降の分析を行う。

統計的分析手法：階層的重回帰分析^{※2}

^{※2} 複数の独立変数から、従属変数に影響を与えている要因を求めると行う分析手法で、その結果から、影響を及ぼす向きやその大きさの違いがわかる。

目的③「具体的な指導の手がかり」

本研究では、大久保・加藤の4分類を次に示すように表記するとともに、実際に分類し、栃木の子どもの規範意識と問題行動経験の状況を把握する。

- ※「A型」：規範意識が高く、問題行動が少ない（＝大久保・加藤4分類では「まじめ型」）
- ※「B型」：規範意識が高く、問題行動が多い（＝「同調型」）
- ※「C型」：規範意識が低く、問題行動が少ない（＝「観衆型」）
- ※「D型」：規範意識が低く、問題行動が多い（＝「不良型」）

次に、問題行動を抑制し規範意識を高める「具体的な指導の手がかり」をさぐるために、「A型」や「D型」の子どもが、当センターが作成した「子どもの環境に関する31項目」に、どのように回答していたか、その傾向を調べる。

分析(4)：規範意識の高低と問題行動経験の多少により、栃木の子どもを大久保・加藤の4分類に分け、状況を把握する。そして、発達に応じたタイプ別の人数の偏りを調べる。

統計的分析手法： χ^2 乗検定

分析(5)：規範意識を高め問題行動を抑制する「具体的な指導の手がかり」を探るために、当センターが作成した「子どもの環境に関する31項目」の回答から、規範意識が高く問題行動の少ない「A型」の子どもに影響を与えている項目を調べる。

同様に、「B型」、「C型」、「D型」と繰り返す。

統計的分析手法：ロジスティック重回帰分析^{*3}

^{*3} 従属変数が幅のある数値ではなく、ダミー変数として設定した「0(「A型」でない)か「1(「A型」である)」が結果となるような要因になる項目を、独立変数(子どもの環境31項目)から求めることができ、その影響の向きと大きさ、なりやすさがわかる分析手法。

具体的には、「A型」を従属変数として、「子どもの環境に関する31項目」の中から項目間の相関の高いものなどを中心に取捨選択した17項目と「社会的望ましき合計」を独立変数として分析を行う。そして、「A型」の子どもにつながる項目(つまり、「具体的な指導の手がかり」と、その項目が良い方に「1」増えると何倍「A型」になりやすくなるか、その倍率(リスク確率)を求める。

目的④「いじめを防ぐ指導の在り方」

同様に、いじめを防ぐ指導の在り方を求めるために、「いじめ容認態度尺度」と「いじめ加担尺度」を質問項目に加え、結果を分析する。分析を通して、「いじめを認めない態度」と「いじめに加担しない児童生徒の育成」のそれぞれの「指導のアプローチ」や「具体的な指導の手がかり」を求める。

分析(6)：「いじめ容認態度」を下げる「指導のアプローチ」を探るために、発達の段階ごとに、「仲間規範」と「先生規範」が「いじめ容認態度(合計)」に与える影響の違いを調べる。

統計的分析手法：階層的重回帰分析

分析(7)：「いじめ容認態度」を下げる「具体的な指導の手がかり」を探るために、「子どもの環境に関する31項目」の中から、「いじめ容認態度(合計)」に影響を与えている項目とその大きさを調べる。

統計的分析手法：階層的重回帰分析

これらにより、いじめを認めない態度を育成するために有効な「指導のアプローチ」と「具体的な指

導の手がかり」を求める。

分析(8)：分析(6)と同様に、「いじめ加担経験」を下げる「指導のアプローチ」を探るため、発達の段階ごとに、「仲間規範」と「先生規範」が、「いじめ加担経験」に与えている影響とその大きさの違いを調べる。

統計的分析手法：階層的重回帰分析

分析(9)：分析(7)と同様に、「いじめ容認態度」を下げる「具体的な指導の手がかり」を探るため、「子どもの環境に関する31項目」が、「いじめ容認態度」に与えている影響とその大きさを調べる。

統計的分析手法：階層的重回帰分析

これらにより、いじめに加担しない子どもを育成するために有効な「指導のアプローチ」と「具体的な指導の手がかり」を求める。

3 研究の結果と考察

3.1 H17年度との比較

比較対象の質問項目は、平成17年度に当センターで作成した15項目である。分析(1)で行った平成17年度の結果と今年度調査の結果の比較を、表5に示す。

表5は、4件法によって得られた回答を「1」～「4」の数値化を行い、平均を算出したものである。表中全ての項目の最小値の「1」は規範意識が低いことを示し、最大値の「4」は規範意識が高いことを示す。結果の増減(変化)については、H22の値からH17の値を引いた。また、それぞれの項目でt検定を行い、有意確率が5%未満だった項目には、「*」をつけた。また、平均で0.1ポイント以上減少した項目には下線を引き、0.2ポイント以上増加した項目は太字で示した。

表5より、小5は、他の学年に比べると、規範意識が高いが、経年変化はなかった。

中2と高2は、ほぼすべての項目で平成17年度調査と比較して規範意識が高くなった。特に中2の向上が顕著であった。

小5で、「公共の場所で携帯電話を使用する」の項目で、意識が有意に下がった。そのほか有意な変化のある項目はなかった。